

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 18 日現在

機関番号：34423

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2012

課題番号：21520356

研究課題名（和文）『失われた時を求めて』と同時代の小説群研究

研究課題名（英文）Marcel Proust's *À la recherche du temps perdu* and his contemporary novels

研究代表者

禹 朋子 (WOO TOMOKO BOONGJA)

帝塚山学院大学・リベラルアーツ学部・教授

研究者番号：30309364

研究成果の概要（和文）：

マルセル・プルースト作『失われた時を求めて』第一篇は 1913 年に発刊された。当初は大きな反響を呼ばず、続巻もしばしば厳しい批判を受けたこの作品は、しかしながら 1930 年代にはその評価が確立したと言って良い。本研究は、この変化の最大の要因と考えられる当時の文芸批評の傾向のいくつかを、1913 年から 1939 年の間に発表されたプルーストに関する新聞・雑誌記事、ならびに他の作家の作品との関連性を分析することによって明らかにしたものである。また、基礎資料として記事、図書 1,870 点を収集・整理するとともに、文献データ管理のシステム作りを行った。

研究成果の概要（英文）：

The first tome of Marcel Proust's *À la recherche du temps perdu* was published in 1913. This novel, which did not attract a great response initially and even received harsh criticism for some tomes, nevertheless established its reputation before the end of the 1930s. This study clarifies some critical tendencies which allowed this change, through the analysis of journal reviews, periodical articles and literary works by various authors, relating to Proust and published from 1913 to 1939. This analysis involved the collection of 1,870 articles and books and the construction of a system of data management.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：フランス文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：フランス文学, プルースト

1. 研究開始当初の背景

『失われた時を求めて』が、様々な批判を受けつつも、1930 年代末頃までに「名作」としての地位を獲得したことは、本研究に先

立つ調査の結果、確認済みであった。しかし批判から賞賛へという転換を可能にした要因については必ずしも明らかではなかった。

2. 研究の目的

作品に内在する絶対的な価値のみが問題であれば、作品評価が変化することはない。評価の見直しは、受容側の感受性が、個々の読者の感性はもとより、地域や時代にも大きく依存し、変化することから生ずるのである。文芸批評は、そのような変化を反映すると同時に、逆にプルースト作品に対する評価形成に一定の役割も果たしたと考えられる。また、プルーストと比較される他の作家・作品は、当時の小説群におけるプルースト作品の位置づけを知るにあたって重要な指標となる。

そこで本研究は、世論形成と反映の場である新聞・雑誌の記事、とりわけ他の作家との比較を含むものに注目し、分析することによって、『失われた時を求めて』第1編発売から第二次大戦開始までのフランスにおける小説作品受容の様相とその変遷の一端を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

1913年から1939年の間に主としてフランス本土で発表された新聞・雑誌記事および文芸作品の収集とその分析を行った。その際、研究規模に鑑み、プルーストへの言及がある記事、プルースト作品と比較対照された小説を対象とした。同時に、収集した文献データを適切に保存、管理、利用する方法を構築した。

4. 研究成果

(1) 関連資料の収集

① 先行研究で指摘されている資料情報を参照しつつ、関連資料の調査を行った。その結果、先行研究の誤りを修正するとともに、新資料を発見することができた。

② 収集作業は主に図書館相互利用による貸借、複写、複製や古書の購入によったが、必要に応じ、所蔵館での書き写し作業も可能な限り行った。これにより、過去に入手済みの資料を含め、分析対象となる資料（記事、図書）1,870点を手元に収集、整理することができた。

③ 国内外の各種図書館横断検索システムをはじめとする通常の調査方法では発見できなかった資料体の存在が明らかになった。

地方紙は所蔵館が少なく、また、状態の悪化のため閲覧も難しいケースが多々ある。ところが各館への問い合わせの過程で、所蔵館によるデジタル化が進められているケースがいくつか判明した。たとえばフランスで最も古い地方紙とされるルアン新聞（*Le Journal de Rouen*）のマイクロフィルム版をルアン公立図書館で閲覧した際、近隣のセヌ・マリチム県立文書館がデジタル版を作成

中であることを知らされた。（調査当時は現地閲覧のみ可能であったが、現在では公開されている。）このようなケースはほかにもあり、また今後増加すると思われる。今後の資料調査においても常に注意を払う必要がある。

(2) 関連資料ライブラリの作成

収集した大量の資料を必要に応じて取り出し、参照できるよう整理し、ストックした。書誌情報は市販の文献管理ソフトと表計算ソフトを使用して管理し、著者、タイトル等だけでなく、キーワードと本文の重要箇所に含まれる単語からも検索できるようにした。

(3) 書誌情報出力ソフトの作成

市販の文献管理ソフトでも、ある程度までは指定の形式で書誌情報を出力することはできる。しかしフランスで一般的な文献記述方法は欧米方式とは異なっており、しばしばこれが問題となる。また管理上、インデックスの作成も必要であったが、市販ソフトでは対応できなかった。

そこで専門業者と協議しながら独自のソフトウェアを作成した。これにより、資料情報を最適な形式で書き出し、雑誌名別、作者別インデックスをわずかな手順で作成することが可能になった。

(4) 資料分析

① プルースト受容全般については、おおむね次のような経過をたどった。作品に対する批判は複雑な文体、登場人物の人格崩壊、同性愛のテーマなどに向けられているが、精緻な心理描写については当初から評価されていた。1922年、プルーストの死を契機とし、未完の続巻への期待と草稿資料に対する関心が増大する。死後出版となった3篇のうち最初の『囚われの女』は、1919年にゴンクール賞を受けた第2篇以上の反響を持って迎えられた。1927年の最終刊発行をまたぎして最初の伝記が出版され、大きな反響を呼んだ。最終巻刊行後、30年代に入ると激しい批判は減少し、版元が登場人物インデックスやアンソロジーを出版するなどして作品の普及に努めた。その一方でプルーストに関する回想記事や書簡が多数発表され、1930年からは書簡集も刊行された。プルーストに関するモノグラフィーも出版されたが、いわゆる「研究」レベルとしては初期段階にとどまっていた。

② プルースト批評においては、他の作家との比較もしばしば行われた。プルースト以前のフランス作家のなかでは、複雑な文体についてはサン＝シモン侯爵、心理描写についてはバンジャマン・コンスタンやスタンダール、

社会の広い層に属する多くの人物を作品に登場させたことについてはバルザックが繰り返し比較の対象となっている。総合するとプルーストは、同時にこれらの作家のいずれとも類似することとなり、全体としては矛盾が生じる。けれどもこのような批評の傾向は、既知の有名作家と関連づけることによって、評価の定まっていな作家、作品を位置づける作業だと考えれば理解できることである。

外国語で書かれた作品については、原作に遅れてフランス語訳が出版されるため、過去の作家であっても、当時アクチュアルな話題を提供していたものもある。ジョージ・メリディス (1828-1908) は、生没年から考えると 19 世紀の作家と言ってよいが、その代表作『エゴイスト』の仏訳が出版されたのは 1924 年のことである。プルーストの文体や物語の展開の「難解さ」については、このメリディスが引き合いに出されることが多い。

ドストエフスキーの場合は、19 世紀末から仏訳が出されていたが、1911 年にジャック・コポー脚色による『カラマーゾフの兄弟』が上演され、20 年代にかけても雑誌『新フランス評論』が盛んにドストエフスキーを取り上げた。プルースト作品の登場人物に人格の統一が欠けているという問題は、一時期批判の要因であったが、多くの批評がこの点をドストエフスキー作品やフロイト理論によって説明している。同じ問題についてジャック・リヴィエールが、その人間理解の深さにおいて、プルーストは 17 世紀の古典作家にも比肩し、よってフランスの伝統に連なる古典的作家であると主張したこととは対象的に見える。しかしいずれの場合も、「外国的なもの」は特異性を、「フランス的なもの」は普遍性を体現するという、根本的には同一の考えが当時の批評に見られるということに他ならない。

③ 批評家が最も頻繁にプルーストと結びつけたのは、同世代のフランス作家、アンドレ・ジッド (1869-1951) とポール・ヴァレリー (1871-1945) である。ヴァレリーは詩人であるが、この時期、この 3 名はしばしばワンセットで言及される。たとえばル・タン紙の書評欄担当者ポール・スデーが三者に関する書評をまとめてそれぞれの名前をタイトルとする冊子とし、さらにはその三冊をセットにして再版したほか、ギュスターヴ・ランソンの『文学史要覧』に記述された最初の 20 世紀の作家もこの三名である。確かに年齢もほぼ等しく、青年期に象徴主義の影響を受け、一次大戦を生き延びた作家としての共通項はある。しかしながらこの現象の理由は、必ずしも明確ではない。詩人ヴァレリーはもとより、同性愛のテーマを共有するジッドとプルーストについてすら、その作品の直接比

較が十分行われたとは言えないし、ヴァレリーとジッドが『新フランス評論』プルースト特集号 (1923 年 1 月) に寄せた文章も、作家相互の熱心な関心の証左からはほど遠いものであった。けれども実際問題として、ジッドやヴァレリーに比べて代表作発表も、知名度の獲得も遅かったプルーストにとって、20 年代以降も存命で活躍を続けたこれらの作家と並列されることは、その評価の安定に益したといえよう。

④ その他同時代の作家との関連性は一様ではない。まずプルースト作品をある意味直接取り入れたケースとして、風刺ではないパステイッシュが二点発表されている。ひとつは当時、様々な作家の模作を行って大成功を収めたポール・ルブウの『…風に』で、プルーストの文体模写は、1925 年、まず雑誌に掲載された。いまひとつは、戦後プルーストの伝記を書くことになるアンドレ・モロワの『チエルシーの方』(雑誌掲載は 1929 年) である。モロワはインタビューで、プルーストをよりよく理解するために書いたと述べている。

作家自身がプルーストについての記事を執筆することはそう多くないが、インタビューという形でプルーストへの賛辞を述べている例として、ジャック・ド・ラクテル (1888-1985)、コレット (1873-1954)、ジョゼフ・ケッセル (1898-1979)、ジョルジュ・ベルナノ (1888-1948) 等の名を挙げることができる。作品のテーマの点で、プルーストと共通点を持つ小説家たちであるが、それぞれの作風は異なっている。またプルーストの影響が直接これらの作家の作品に見受けられるかといえば、当時の批評はこれを実証している訳ではない。ただ 1900 年代にはコレットが、その他の作家たちも 1920 年代には代表作を発表し、著名な小説家であったことは間違いなく、彼らの意見表明は、ジッドとヴァレリーの場合と同じ影響を与えたと考えるのが妥当である。

プルーストの心理描写は当初から評価されていたが、20 年代には、レイモン・ラディゲ作『ドルジェル伯爵の舞踏会』(1924 年刊) の評に、ラディゲは心理描写においてプルーストに劣ると述べた例が見られる。スタンダールに代わり、今度はプルーストが心理描写の技量評価の基準としてあげられているのである。同様の例は、時代が下るに従って増加する。こうした言及が繰り返されることによってもプルーストの権威付けが行われたと考えられる。

新聞・雑誌の論評は、研究論文ではない。小説作品を詳細に検討する余地はない。そこで言及される作家、作品の名前は、その背後に暗黙の前提を隠した記号として機能する。

プルースト批評の中で他の作家が言及される時、あるいは他の作家からのプルースト評価が表明されるとき、読者はその「前提」を推量しながらプルーストの位置づけを知ると同時に、自分の中のプルースト評価を修正していく。さらなる検証には、多くの作家を軸とした同様の資料調査・分析が必要となろうが、このフィードバックが十全に機能したことは、プルーストの評価を高めた要因のひとつであると考えられるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①禹 朋子, 「第一次大戦後のプルースト受容—『花咲く乙女たちの陰に』とゴンクール賞の余波—」, 『ステラ』, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 査読有, 31号, 2012年12月, p. 115-139.

<http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~french/Stella%20Files/Stella%20main.html>

②禹 朋子, 『失われた時を求めて』初期受容—『スワン家の方へ』—をめぐって, 『ステラ』, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 査読有, 30号, 2011年12月, p. 191-207.

<http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~french/Stella%20Files/Stella%20main.html>

③禹 朋子, 『失われた時を求めて』受容と同時代の評論家達: エドモン・ジャルー、ポール・スーデー、フェルナン・ヴァンデレム, 『帝塚山学院大学研究論集』(リベラルアーツ学部), 44号, 2009年12月, p. 1-14.

<http://www.lib.tezuka-gu.ac.jp/>

[学会発表] (計3件)

①Tomoko WOO, « La réception d'A la recherche du temps perdu en France de 1913 à 1954 », Le Centre de Recherches Proustiennes de la Sorbonne nouvelle : historique et perspectives 新ソルボンヌ大学プルースト研究センター: その歴史と今後の展望, 於パリ第三大学 (フランス), 2012年11月16日.

<http://www.univ-paris3.fr/le-centre-de-recherches-proustiennes-de-la-sorbonne-nouvelle-historique-et-perspectives--184701.kjsp>

②Tomoko WOO, « Proust et le dix-neuvième siècle selon ses critiques contemporains », 国際学会 Proust face à l'héritage du XIXe siècle : filiation et ruptures 19世紀の遺産と向き合う

プルースト: 継承と断絶, 於関西日仏学館 (京都), 2010年11月20日.

③Tomoko WOO, « Dostoïevski dans la Recherche : les enjeux internes et externes », 国際学会 Proust en son temps: contextes culturels d'une genèse romanesque プルーストとその時代: 小説生成の文化的コンテクスト, 於東京日仏学館, 2009年4月19日.

[図書] (計2件)

いずれも部分執筆

①Tomoko WOO, « Proust et le dix-neuvième siècle selon ses critiques contemporains », dans Pierre-Edmond Robert, Nathalie Mauriac-Dyre éd., *Proust face à l'héritage du XIXe siècle : tradition et métamorphose*, Paris, Presses de la Sorbonne nouvelle, 2012, p. 61-73.

②Tomoko WOO, « Dostoïevski dans la Recherche : les enjeux internes et Externes », dans Nathalie Mauriac-Dyer éd., *Proust aux brouillons*, Turnhout, Brepols, 2011, p. 217-226.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

禹 朋子 (WOO TOMOKO BOONGJA)

帝塚山学院大学 リベラルアーツ学部・教授

研究者番号: 30309364

(2) 研究分担者 なし

()

研究者番号:

(3) 連携研究者 なし

()

研究者番号: